10. ニューロリハビリテーション研究会

10. 1. 第 1 回身体運動制御学とニューロリハビリテーション研究会

日　時：平成 27 年 12 月 5 日（土曜日）9 時 30 分～16 時 50 分

会　場：畿央大学

1）招待講演

・野村泰伸（大阪大学基礎工学研究科機能創成専攻）
「ヒト静止立位と歩行運動の安定性と揺らぎの定量化と数理モデルシミュレーション」
・花川　隆（国立精神・神経医療研究センター）
「歩行の神経制御機構」

2）指定演題発表

・奥埜博之（摂南総合病院）
「狭い間口通過時に生じるすくみ足の発現機序の検討」
・石垣智也（畿央大学大学院健康科学研究科）
「ライトタッチ効果の神経メカニズムに関する検討」

3）ポスター発表　17 演題

2015 年 12 月 5 日（土）に，第 1 回身体運動制御学とニューロリハビリテーション研究会を開催致しました.記念すべき第 1 回には，招待講演として，野村泰伸先生（大阪大学）と花川隆先生（国立精神・神経医療研究センター）にご登壇頂いた.

野村先生からは，**「ヒト静止立位と歩行運動の安定性と揺らぎの定量化と数理モデルシミュレーション」**と題したご講演をいただきました．直感的には，ヒトは綱引きをするように，直立姿勢から変位すると，直立姿勢に引き戻すための制御を常に持続的に行っていると考えがちですが，実際には重力に身を任せて，常に揺らいでおり，卓球をするかのような間欠的制御を行っていることを，例を示して頂きながら，詳細な解析に基づいて，解説して頂いた．またパーキンソン病患者さんの立位姿勢制御についても，分かりやすく説明して頂き，参加者にとっては，日ごろ臨床で目にしている現象の中身について理解する素晴らしい機会になった.

花川先生からは，**「歩行の神経制御機構」**と題したご講演をいただきました．先生ご自身の研究バイオグラフィーにおけるデビュー作が「歩行の神経制御機構」とのことで，少々気恥ずかしいとおっしゃられながらも，膨大な研究成果について解説頂いた．リハビリテーションにおける大きな関心事の一つが，歩行であるが，大脳皮質－基底核ループ，基底核－脳幹系による制御機構，パーキンソン病における歩行制御機構の病態，代償的メカニズムについて，非常に分かりやすく解説して頂いた.

両先生とも，基礎の立場におられながらも，実際の患者さんを対象にした研究を行われておられ，リハビリテーションにとって非常に有益な情報を発信し続けて下さった．今後は，リハビリテーション側からも，臨床研究・症例研究を発信し，双方向性に繋がり，コラボレーションしていくことが望まれる.

指定演題では，日頃臨床に従事しておられ，臨床で得た疑問や問題について，研究を通じて検証する作業を実践しておられるお二人の先生にご登壇頂いた.

奥埜博之先生（摂南総合病院）からは，PSP 患者さんにおける狭い間口通過時に生じるすくみ足は，前頭葉の過活動に起因するのではないかという仮説を，脳波を使用したケーススタディで検証した内容を発表して頂いた.

石垣智也先生（畿央大学大学院健康科学研究科）からは，臨床で散見されるライトタッチ効果について，その神経メカニズムに関する脳波と tDCS を使用した研究成果を発表して頂いた.

ポスターセッションには，17 演題の発表があり，自覚的身体垂直位から立位姿勢制御，歩行制御といった身体運動制御に関連の深いものから，疼痛，半側空間無視，身体性まで非常に幅広い内容となった．

－ポスターセッションの様子－

－参加者・講演者との集合写真－

10. 2. 第 2 回社会神経科学とニューロリハビリテーション研究会

日　時：平成 27 年 12 月 6 日（日曜日）9 時 30 分～16 時 50 分

会　場：畿央大学

1）招待講演

・村井俊哉（京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座（精神医学））
「「社会性」という視点から心の病気について考える」
・平田　聡（京都大学野生動物研究センター熊本サンクチュアリ）
「チンパンジーの社会的知性」

2）指定演題発表

・松尾篤（畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター）
「自己評価と社会性」
・西　勇樹（畿央大学大学院健康科学研究科）
「疼痛閾値と内受容感覚の感受性および不安との関係性」

3）ポスター発表　15 演題

2015 年 12 月 6 日（日）に，第 2 回社会神経科学とニューロリハビリテーション研究会を開催致しました.

今回は，村井俊哉先生（京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座（精神医学)）と平田聡先生（京都大学野生動物研究センター）をお招きし，ご講演して頂いた.

村井俊哉先生からは,**「「社会性」という視点から心の病気について考える」**というテーマで，社会的認知，利他的行動，共感，報酬などを取り上げてお話しして頂いた．精神科医である村井俊哉先生の視点だからこその講演は，リハビリテーションセラピストにとって重要なことを考えさせられる良い機会となった.

平田聡先生には,**「チンパンジーの社会的知性」**というテーマで，チンパンジーの社会性などを講演して頂いた．チンパンジーの行動を根気強く観察し，それをきっかけに社会性というものを解明している姿は非常に尊敬すべきであった．またチンパンジー飼育での苦労エピソードを随所にお話し頂き，その試行錯誤はまさに臨床現場で苦労しているセラピストと重なる部分があった.

指定演題では，松尾篤先生（畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター）から「自己評価と社会性」，西勇樹先生（畿央大学大学院健康科学研究科　修士課程）から「疼痛閾値と内受容感覚の感受性および不安との関係性」を話題提供して頂いた．松尾篤先生の発表では，自分の過度な自己評価と社会的評価との関係や，内受容感覚と共感能力との関係について，西勇樹先生の発表では，内受容感覚と疼痛刺激時の自律神経活動との関係がディスカッションされた．平田聡先生にも参加して頂き，良いディスカッションと場になった.

ポスターセッションでは，１５演題のポスターがあり，報酬学習・不安・抑うつ・疼痛などの社会神経科学とリハビリテーションをリンクさせるような内容が多く，時間の許す限りの活発なディスカッションだった.